

# 藍で繋がる伊達愛プロジェクト

～「地学協働」を意識した地域と共に歩む学校づくりをめざして～

北海道伊達高等養護学校 校長 淺井 謙 作

## 1 はじめに

### (1) 本校の概要

本校は、「伊達と言えば北の湘南！」で有名な北海道伊達市にあり、昭和56年4月に北海道で初めての職業学科の高等養護学校として開校した。現在106名の生徒が園芸科、窯業科、農業科、木工科、工業科、家庭総合科の6学科に在籍し、個々の特性を活かし卒業後に一般就労を目指す学校である。

以下、取組について論述していく。

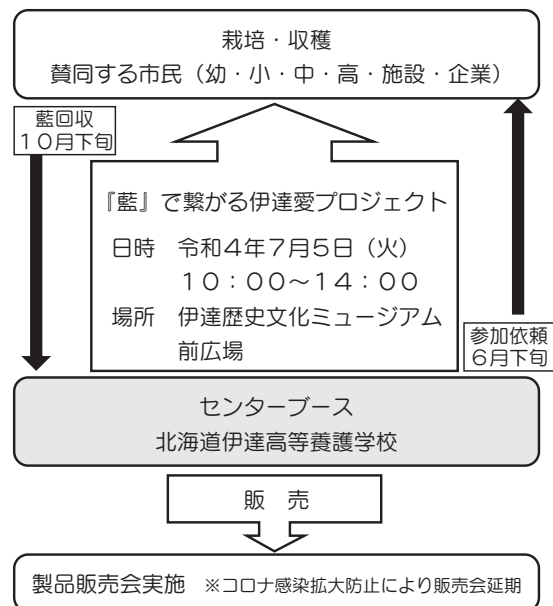
### (2) プロジェクトの経緯

本校では、平成31年から伊達市の古き良き伝統や文化を知るために、伊達市の伝統工芸の一つである「藍染め」を研究してきた。そして先人の思いや技術等を少しでも伝承することで、本校の職業学科としての特性を活かして伊達市へ貢献することができ、伊達市の地域活性化の糸口に繋がるという思いの中で実践してきた。藍染めに関わる作業工程については、本校の教育課程上及び教場（農場）における藍の作業には限界があり、現状以上の作業（藍の生産性）を展開する困難さが課題となっていた。そこで、本校と伊達市がコラボレーションして藍の播種、そして苗を栽培から収穫、藍染めまで一緒に取り組むプロジェクトを立ち上げることにした。それが、「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」である。本プロジェクトは、趣旨に賛同してくれる伊達市民や幼・小・中・高校及び施設、企業等の協力を得て、各々が「藍を栽培、管理して育て収穫して本校へ届けてもらう」というものである。藍の播種からポット上げまでは、本校農業科と園芸科の生徒が授業で取り組み、希望する方へ藍の苗を預け育ててもらい、収穫できるころに本校へ持ち寄っていただくという「藍育（あいいく）ファンディング」の実施を考案した。これにより、藍の生産性は向上し安定した藍染め作業実施の材料が確保できる。さらに、生徒にとってより良い学びの機会となることだけではなく、学校と地域が一つとなり取り組むことで、伊達市の地域活性化の向上に繋がり、伊達市が掲げる「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」にある3つの視点、①地域資源を生かした産業を育て雇用を生み出す②選

ばれる「市民幸福度最高のまち」となる環境をつくる③生涯健康社会の実現、にも繋がると考えた。そして、将来このプロジェクトを通して伊達市民の障害者理解が今以上に進み、本校生徒が伊達市をはじめ、一般就労の道を切り拓くことができれば、伊達市におけるノーマライゼーションの深化につながり、伝統や文化を伝承し伊達市が掲げる「2060年の伊達市『こころ』も『からだ』も健康に暮らせるまち 健康に暮らすなら伊達市」のビジョンに繋がるプロジェクトと考えて推進してきた。

今回、本校が目指してきたのは、地学協働をキーワードに地域の伝統文化の伝承というとても大きなものである。その中でも藍染めは化学染めではなく、本来の藍独特の色合いが出る自然発酵にこだわった。1年目は惜しくも失敗に終わったが、今年度2年目において見事成功にいたった。これには多くの方々の御指導や御助言等サポートしていただいたからこそその結果である。特別支援学校による藍染めの自然発酵の成功は全国でも初めてのことだと感じている。

今回はこの快挙でもある自然発酵の成功までの生徒と教師のプロジェクトをまとめた。



## 2 プロジェクトの取組

### (1) 藍育ファンディング

藍育（あいいく）ファンディングでは、クラウドファ

ンディングの「その目的に賛同する人がお金を出资し、できた製品を返礼品としてもらうシステム」を活用し、本目的に賛同する市民等へ藍の苗を渡し収穫まで育ててもらおう。そして収穫時期に本校へ持ってきていただく。(もしくは取りに伺う。)その返礼品として、本校の製品を渡すというシステムを考案し、地域と密接に取り組める方法の一つとして進めた。

4月上旬、昨年度に播種した藍の苗を丁寧にバットから外し一つ一つポットへ移す作業から始め、7月の当日まで愛情込めて温室で育てた。また、藍の苗は、天候の状態を確認し5月に本校の農場に定植した。



生徒たちは藍育ファンディング本番に向けて、接客対応など事前学習を行い担当職員と確認しながら本番に向かった。



7月5日(火)伊達歴史文化ミュージアム前広場において「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」の藍育ファンディングを開催した。担当した3学年の生徒たちは、藍の苗約300ポットを無償で配付するブースと、各学科の製品



(木工科のベンチ、園芸科のドライフラワー、窯業科のコップやお皿など)を格安で販売するブースを設営した。

開店と同時に市民が続々と集まり、藍の苗300ポットは1時間足らずで完売となった。市民からは、「みんなすごいね～ありがとう!」という声をいただき、生徒たちは達成感や充実感を肌で感じ、地学協働の大切さを学んだ。

## (2) スクールキャラクターの取組

生徒会がこのプロジェクトを盛り上げようと、本校のキャラクターづくりを提案し、全生徒に呼びかけ「生徒会企画! スクールキャラクターの募集!!」を始めた。応募総数40作品を超える中から全生徒による総選挙が行われ、圧倒的投票数で見事選ばれた。「侍のサム」と、「藍のアイ」を繋げて名前を「サムアイ君」とした。今回生徒会が企画運



営することで、生徒や先生方の中に一体感が感じられ、本校への帰属意識の高まりを感じ保護者や地域関係者の皆様からも高評価をいただき、生徒会執行部の生徒や担当職員も大変喜んでいました。決定後は、美術専科の職員により手書きデータからデジタル化された「サムアイ君」は、HPやのぼり、名刺、封筒などあらゆるところで使用され、今では本校のマスコットとして大活躍中である。

## (3) 各学科の取組

本校には6学科があり、それぞれが藍で繋がりこのプロジェクトに参加し各学科の藍製品開発に挑戦している。具体的には下記のとおり。

### ①園芸科：藍の入浴剤や消臭ポプリの試作



園芸科では、刈り取り乾燥させた藍の葉や茎を細かく加工し、10cm角の大きさの布の中に詰めて入浴剤や消臭ポプリとしての試作に取り組んだ。

藍は大学の論文等では、疲労回復や抗菌作用等様々な効果が証明されていることを突き止め、改良に改良を重ね成功することができた。

### ②窯業科：藍色の焼き物の試作



窯業科では、藍の葉を釉薬に混ぜ焼いてみたり、藍の葉を粘土に混ぜたりと挑戦したが、どれも上手くいかなかった。今のところ藍色の釉薬を使用した焼き物となっているが、現在も生徒と教師が日々研修し試作に励んでいる。

### ③農業科：藍の生葉染め、羊毛染めの試作



農業科では、藍染め液の作成が中心だが、それ以外にも生葉染めは、藍の生の葉と水をミキサーにかけ、そこに薬品を入れ一定の時間が経つとインジゴが生成され、本来の藍色ではなく奇麗な薄い水色に染まった。染めた布は生徒たちの主体的な取り組みの中でハンカチやコースターとして試作した。また、羊毛染めでは、ブローチやイヤリングなど生徒の斬新なアイデアを取り入れて試作中である。

#### ④木工科：木材を藍染めしたベンチの試作



木工科では、木材を染める研修に取り組んでいたが、思うように染めることができなかった。何度も試行錯誤する中で、木材を熱湯にくぐらせる

と染まりやすいということが判明し、時間はかかったが、綺麗に染め上げることに成功した。

木工科では、地域の小学校から藍染めされたベンチの受注があり、デザイン重視ではなく安全性を第一に考えた新しいデザインは、生徒と職員が何度も検討を重ねた。例えば、染めた木材が服やズボンにうつるのではないか、木材と木材の間に指や足が入ってけがをしないかなど、藍のベンチを作成する中で多くの気付きに触れることができ、主体的な学習への意欲も高まった。

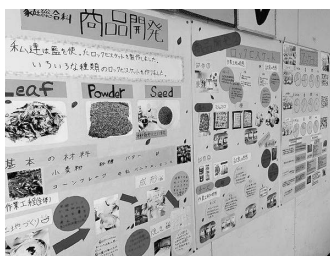
#### ⑤工業科：藍染め布を用いた金工カレンダー



本校の工業科作業学習ではコンクリート製品づくりがベースとなる。しかし、今回は各学科で藍を活用するというテーマのプロジェクトでもあ

るので「金工製品に藍を活用する方向で生徒と一緒に何ができるか」というところから話し合い、金工のカレンダーに藍をコラボすることになった。切り出された鉄板を加工し、藍染めされた布を置きその上から透明の亚克力板で挟み固定すると、またひと味違うカレンダーとなった。

#### ⑥家庭総合科：藍のロックビスケット



家庭総合科では、学校祭でも大人気であるロックビスケットとのコラボで進めることはすぐに決定したが、藍そのものが食べられるものなのかどうなのか、安全面を採ることから始めた。担当職員で手分けしながら調べ安全性を確保し、6学科最後になったが「藍（愛）のロックビスケット」として校内販売を実施した。購入した教師にアンケート用紙を配付しデータを集め製品開発に活かした。今回は乾燥葉を荒く砕いたリーフ、ミキサーで細かくしたパウダー、藍の種を煎ったシードの三種類とした。今後はデータ分析からシード

をベースとした新しい配合で再挑戦していく。

このように各学科が製品開発をすることで、生徒の主体的で対話的・深い学びの学習が向上し、職員と生徒の「難しいけど面白い。もっと挑戦したい」というモチベーションにも繋がっている。今後も引き続き斬新なアイデアを出しながら製品開発、試作に取り組んでいく。

#### (4) 返礼品について



1年目は、まだ藍染めの製品が完成していなかったため、本校の各学科の製品である窯業科の小皿、園芸科の入浴剤、農業科のポップコーンなどを返礼品として地域の皆様にお渡しした。今年度は、実際に藍染めした各学科の製品も増えてきているので、本校の自然発酵の藍染めで製品を量産し返礼品として、地域の皆様に少しでも還元していきたいと考えている。

#### (5) 道外の高校との交流学習の取組

1年目このプロジェクトを進める中で、教師から道内で藍の取組をしている学校があれば交流学習をして生徒同士の繋がりを広めてはどうかと提案があった。そこで農業高校の教師の御協力もあり調べることができた。道内で藍染めに係わる取組をしている学校はなかったが、徳島の県立A高等学校が実際に藍を種から育て収穫し藍染めを行い、また、地元企業とコラボして地域活性化の一つとして取り組んでいることを発見した。そこですぐにその学校の校長へ連絡を取り事情を説明し交流学習をすることとなった。



令和4年1月18日(火) Zoom回線を用いた遠隔による、徳島県立A高等学校との交流学習が行われた。はじめに両校生徒の自己紹介から始まり学

校紹介があった。当日本校は雪が積もっていたので徳島の生徒たちは「すごーい!!雪を見たいです!!」という場面もありリラックスしたムードで取りかかることができた。

本題の藍の取組については、本校から1年目の実践を説明。結果として自然発酵に至らなかったことを伝え終了した。次に徳島県立A高等学校の実践発表が始まると、記録をとる生徒、質問する生徒など積極的に関わろうとする姿が見られた。これはその場にいた教師も予想をし

なかったことだった。

生徒自らが自分たちの取り組んだ藍の自然発酵が失敗に終わり、落ち込んでいる中での交流学习だったので、何故失敗したのか、原因は何か、どうすれば成功する可能性があるのか、次から次へと質問が出された。徳島の生徒たちの、その一つ一つの質問に丁寧に優しい言葉でわかりやすく説明する姿は、まさしく本来の交流学习であり、時空を超えた素晴らしい交流学习となった。



終了後、生徒たちから担任へ話した言葉は、「僕たちは確かに自然発酵に失敗をしました。でも落ち込んでいる訳にはいかないし、これは失敗ではなく学びだと思いたいです。この学んだことを後輩たちに繋げたいと思います。僕たちはあと少しで卒業しますが、先生なんとかして成功させてください」と委員長が話してくれた。感動した。このプロジェクトを始めるときには、こんなにも生徒たちが主体的に取り組むことはあまり予想していなかった。どちらかというと、教師が指示をしたそのとおりに生徒たちが動く、そんな活動が多いと予想をしていた。しかし、それがこの一年間取り組む中でこんなにも生徒たちが考え悩み行動し、上手いかず失敗して落ち込みを繰り返し、それでも最後には後輩のために、なんとか成功させたい思いを担任へお願いをする。そんな成長を目の当たりにできたことは、藍の自然発酵の成功よりも、もっと大事なものを学びとれたことだと思った。

### 3 実践の成果と可能性

中央教育審議会は平成27年12月に、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」の各答申をまとめた。そこには地域との連携については従来から「開かれた学校づくり」として進められてきたが、「地域とともにある学校」はさらに一歩踏み込んで、地域の人々と学校が教育目標やビジョンを共有して、一緒にパートナーとなることを求めている。また、北海道教育委員会では、地域学校協働活動を「地学協働」と造語化し、

地域と学校が相互にパートナーとして連携、協働する活動を積極的に展開し、地域と学校がWin-Winの関係を構築することが求められ、地域のあらゆる方々と繋がり参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う活動としている。

今回、本校が取り組んだ「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」は、こうした背景を基に伊達の伝統工芸の一つである藍に焦点を当てた。このプロジェクトを通して高齢者、成人、学生、保護者、民間企業、障がい者施設等様々な幅広い地域住民等の皆さんと繋がることで、本校のプロジェクトを知っていただける機会だけではなく、伊達市の伝統工芸や文化、伊達市が進める「だて学」を振り返る機会となった。学校教育目標や伊達市が掲げる「2060年の伊達市『こころ』も『からだ』も健康に暮らせるまち 健康に暮らすなら伊達市」のビジョンに繋がり、さらに地域と学校がWin-Winの関係となっていく可能性が非常に大きいと考えている。

### 4 おわりに

このプロジェクトを通して改めて学んだことは、学校内で完結している学習からの脱却ということだった。地域に足を運び地域を一つの教場として捉え、地域で活動する中で、多くの地域の方々と関わることで、学校教育はこれで大丈夫か、ずれていないか、遅れていないかなど、点検、発見、改善等様々な視点を学ぶ機会となった。地域住民や保護者が学校運営に参画する「コミュニティー・スクール（学校運営協議会）」の推進が挙げられている中、本校もコミュニティー・スクールを今年度から設置し、多くの御助言をいただきながらこのプロジェクトを進めてきた。こうした社会や地域の繋がりの中で学ぶことで、生徒たちは、自分の力で人生や社会を少しでもよりよくできるという実感をもつことができ、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という大きな目標へ繋がっていくと確信している。

今回、藍の自然発酵に成功し、プロジェクトを進める中で一定の成果が得られているが、まだまだ課題も多々ある。この課題一つ一つにしっかり向き合い、生徒、職員、そして地域が楽しみながら考え悩み、ワイワイしながら多くのことを学び合える、そんなプロジェクトになっていけるように引き続き学校としてできることを全力で取り組み探し続けていく。